

## 令和8年度 旭川市工芸センター運営委員会 会議録

日 時 令和8年8月4日（火） 午前10時30分から12時まで

場 所 旭川市工芸センター会議室

出席者 （委員）若狭委員、木村委員、石黒委員、佐々木委員、宮島委員、滝野沢委員、  
小泉委員、遊佐委員、河原崎委員  
（事務局）浅利経済部長、工芸センター 小関所長、稲垣副所長、青木主査、  
柴田主査、佐藤主査

会議の公開／非公開の別 公開

傍聴者 なし

会議資料 次第  
委員名簿  
資料1 令和7年度事業報告書  
資料2 工芸ニュース vol.89  
資料3 工芸センター利用実績の推移  
資料4 令和8年度の事業概要

---

### 1 開 会

- ・あいさつ（浅利経済部長）

### 2 議 事

#### （1）委員長、副委員長の選任

- ・互選により、委員長に佐々木委員を、副委員長に澤田委員を選出。

#### （2）令和7年度事業の報告

#### （3）令和8年度事業概要について

- ・工芸センターより、資料1、2、3に沿って令和8年度事業内容を報告、資料4に沿って事業概要を説明。
- ・各委員より特段の意見なし。

#### （４）意見・情報交換

- ・各委員より、工芸センターへの要望や、各業界の動向などを情報交換。

##### （委員より）

家具業界全体の状況としては、オフィス家具などの特注品を扱っているメーカーはとても忙しく、その一方で既製品中心のメーカーは販売に苦戦しているという状況です。既製品だけでやっていこうとすると、今後はさらに厳しくなるだろうと感じます。

特注家具の特徴として、木材だけではなく金属や樹脂が関わってくることが多いので、今後そういった分野の知識を深めていく必要があると感じています。また塗装について、自社で行っているところは少なく、多くのメーカーが外注に出しているような状況ですが、今後は内製化していくことも大事だと感じています。工芸センターで、これらの知識を学べるようなプログラムを企画してもらえるとありがたいです。

##### （委員より）

昨年の技能五輪全国大会（家具職種）では、旭川地域から出場した６名全員が入賞するという素晴らしい結果となりました。指導に当たってくれた旭川高等技術専門学院や工芸センターに感謝しています。

また旭川木工技能競技大会は今年で５年目となりましたが、今後も継続的に開催することを考えており、デザインセンターに設ける記念モニュメントには５０年分の優勝者名のスペースを用意していますので、工芸センターには今後も引き続き協力をよろしくお願いします。

私が所属する家具メーカーは昨年、東川町の産業ツーリズム施設「クラフトピア」に移転しました。人材育成や担い手の確保に重点を置いて事業を行っています。技能五輪での活躍や、様々な講習会等の取組が行われていることなどを、家具産地旭川の魅力としてしっかりと発信することで、国内や海外から、家具づくりやデザインに関わりたいという方々を呼び込む原動力につなげていきたいと考えています。

最近の問題意識として、家具業界としての理念が揺らいできているのではないかと感じています。

地場産業がいかに地域と密接に関わって地域全体として発展していけるのかという考え方であったり、私たち自身がこの産業を将来に渡って残していくのだという熱量が、少し揺らいでいるように感じます。今後、今日ご出席の委員の皆様にも様々なご相談をさせていただきながら、あらためて理念設計をしていく必要があると考えていますので、よろしくお願いいたします。

(委員より)

建具事業協同組合は、20～30年前は50社以上の組合員がいましたが、廃業などが相次ぎ、近年は11社ほどになっています。組合の活動としては、市営住宅などの公共事業を受注し、組合員の中で分担・協力して請け負うなどしています。

最近の住宅では大手メーカーの既製品が主流となっており、特注家具を導入する方は少ないです。また和室を設ける住宅も少なくなっており、業界全体として厳しい状況です。

これまで建具業界では、海外展開についてあまり考えてきていませんでしたが、家具・クラフト業界の取組なども参考にしながら、発展していけるように考えていきたいと思っています。

(委員より)

旭川木のモノ組合では、今年2月に、ニセコのリゾートホテルのロビーで、市場調査を兼ねたクラフト展を開催しました。来場者の大半は1週間ほど連泊中の外国人の家族連れで、日本人はほとんどいないような状況でした。4日間で100万円ほどの売上げがあり、1人で10万円近く購入していただいた方もいらっしゃるなど、購買意欲の高さを感じました。

同じ会場で、7月にも同様の展示販売会を開催したところ、冬とは異なりほとんどが日本人で、1～2泊程度の短期滞在の方々が中心でした。売上げは3日間で5～6万円程度にとどまりました。

冬場のインバウンドの方々の購買意欲の高さをあらためて感じる結果となり、外国人が来る場所には大きなチャンスがあると実感しました。来年の冬も開催したいと考えています。

このほか今年9月には、旭川木のモノ組合と東川木工会、おといねっぶ美術工芸高校が共同で、大阪梅田の阪急百貨店で開催される北海道物産展での展示販売会を予定しており、準備を進めているところです。

(他の委員からの質問)

ニセコのクラフト展では、インバウンドの方々にはどのような商品が人気でしたか。

(委員より)

木のコブを生かしたような工芸品的なものから、靴ベラやミラーなどの商業ベースの量産品まで、様々な商品を持ち込みましたが、ジャンルを問わず買っていただけました。

傾向としては、ヨーロッパ系には工芸品的なものが、アジア系には商業ベースのものが好まれたという印象です。

(委員より)

旭川地方木材協会は現在60社が会員となっており、業種は、種苗、造林造材、輸送、製材、製紙など様々です。

中東情勢による包装資材関連の問題について、造林造材の現場では、チェーンソーなどが納品までに時間がかかる目詰まり現象が顕著でした。最近は入手できるようになりましたが、値段は高いままとなっています。

製材現場でも、ビニールシートやPPテープが不足し入手に時間がかかっていました。現在は落ち着いてきていますが、価格が10～15%ほど上がって常態化してしまい、コストを引き上げています。

本州では家具メーカーが製材価格の値上げを要請されるといったうごきもみられ、特に既製品中心の家具メーカーは厳しい状況で苦労しているようです。また、ある大手家具メーカーでは、刃物の一部にナフサが使われている特殊な機械があり、手に入りにくくなっているのが不安を感じているとの話も聞いています。

(委員より)

旭川やきもの協会が主催する旭川陶芸フェスティバルは、今年で30回目となります。皆さまへの感謝の気持ちを込めて、大々的にいろいろな記念企画を行おうと考えています。

開催期間の9月19～20日は食べマルシェも開催中なので、マルシェのお客様を陶芸フェスティバルに呼び込み、陶芸フェスティバルからもマルシェに行ってもらえるよう工夫し、旭川をお祭り状態にしたいと思っています。

7月に、江別のやきもの市に行ってきました。全道から250ほどの出展がありましたが、アマチュア作家やガラス工房などを除くと150窯で、そのうち105窯が旭川陶芸フェスティバルに参加していただけます。

江別の会場では、「旭川のやきものはいいね」という感想を複数の方からいただきました。旭川のものにはしっかりと焼き物のイメージがあって、今どきのポップな感じのものとは違うね と言っていました。

最近の業界の状況としては、材料を販売する店が旭川地域からなくなってしまい、札幌まで買いに行ったりネット通販を利用しなくてはならなかったりと、苦労しています。

また、断捨離ブームで新たなものを買わないという風潮もあって、陶芸への購買意欲は下火の傾向が続いていましたが、ここ数年は、30～40代のやや若い世代の方々が、子育てが一段落したので新しい食器を買ってみようかと考えてくださるようになるなど、新しい波がきているような気がしています。

10月には、昨年に引き続きイオンモール旭川駅前でのやきもの市なども計画しています。

(浅利経済部長より)

旭川市では数年前に、ふるさと納税の返礼品に旭川家具を登録することに力を入れました。現在では、旭川市の返礼品は家具がジングスカンを抜いて1位となっています。

旭川のやきものに関しても、ぜひ返礼品に登録してみしてほしいと思います。登録することによりリスクはまったくなく、手続きも非常に簡単です。

(委員より)

北海道教育大学で、主に中学校の技術科教員を養成しています。

現在の技術科の内容は、木材・金属・プラスチックを含めた材料の加工技術や、機械・電気に加え、園芸、農学、情報プログラミングなど、多岐にわたっています。これらの技能や知識をもとに問題解決能力を身につけようという教科です。

現在、技術と家庭科はセットの教科ですが、3年後には家庭科が分離し、技術と情報をあわせた新たな教科となることが予定されています。それに伴い授業時数が倍近くになるため、教員が足りない状況となっています。このため、技術科免許を有していない教員を対象にした技術科教員認定講習会を、夏休みや冬休みの期間を利用して行っており、今年も約80名近くが受講しています。

この講習での実習会場や講師の確保に苦勞しており、今後工芸センターに相談させてもらうことがあるかもしれませんので、よろしくお願いします。

(委員より)

旭川市立大学の教員をしています。またこれまでには、製紙会社、航空会社、ホテルなどを経験してきました。

現在、北海道開発協会発行の月刊誌で、食をテーマに地域文化を紹介する連載エッセイ「ガストロノミックツーリズム in 北海道」を執筆しています。1月号では旭川の男山酒造を紹介しました。酒造内の売店で、未成年でも手に取ってもらえるようソフトクリームの販売などを行っていることや、家具組合と連携して旭川家具のベンチを導入したことなどを紹介したいと考えて取り上げました。

先ほど、ニセコでのクラフト展が盛況だったとのお話がありました。冬のニセコを訪れるインバウンドの富裕層の方々を、ぜひ旭川にも呼び込みたいです。旭川エリアにも良質なゲレンデがありますし、富良野は「第二のニセコ」とも呼ばれています。旭川空港イン・アウトの誘客を進め、買い物だけでなく、木工などの体験や、家具工場やデザインセンターなどの見学、また旭川のやきものに触れて、買っていただく、そのような取組を進めていくことが重要だと思います。

(委員より)

林産試験場では、約60名の研究職員により、道産木材の利用技術などについて研究を行っています。

最近の主要な研究テーマのながれのひとつに、公共建築物への木材利用があります。これまで木材の建材は主に住宅用として使われてきましたが、新規住宅着工件数が減少する中で、2012年に公共建築物を対象とする木材利用促進法が施行され、さらに2022年には対象が公共建築物以外にも拡大されました。公共建築物や大型建築物では、防火性能や防腐性能などが一般住宅とは異なるので、そういった面から製品開発や技術開発などを行っています。

また、ウッドショックや円安の影響により国産材や道産材の使用率が高まっており、これらの材料の使用に関する研究等も行っています。

建築物のほか、最近では木材の土木利用も増えています。例えば、工事現場に敷く鉄製の敷板を、木製の集成材に置き換える研究等も行っています。

広葉樹に関しては、パルプ材として使われていたものをもっと付加価値の高いものに利用できないかという市場調査や、ミズナラなどの価格高騰を受けて酒樽の材料に他の樹種を使えないかなどの研究なども行っています。

ほかにもいろいろな研究・開発を行っていますので、何かあればご相談いただければと思います。

(工芸センター)

皆様からいただいたご意見を、今後の工芸センターの運営や各種施策の推進に反映してまいります。本日はありがとうございました。

### 3 閉 会